

【ポスター発表】

**独立型社会福祉士における活動志向領域の類型化**

— 質的データの分析から —

○ 弘前学院大学 小川 幸裕 (004625)

〔キーワード〕 独立型社会福祉士、活動志向性、活動領域

**1. 研究目的**

近年、既存の制度や福祉サービスだけでは対応が困難な生活課題が指摘されている。このような狭間にある課題への対応を可能とするソーシャルワーカーとして独立型社会福祉士の活動への期待が高まっている。独立型社会福祉士は、高い自由度が発揮できる環境のもと裁量性・中立性・即応性などの強みを発揮し制度の狭間にある課題への対応を可能としている。しかし、独立型社会福祉士は、脆弱な経済的基盤や個人対応の限界、低い社会的認知など多くの課題を抱えており、現在においてもソーシャルワーク実践の質を担保した継続可能な活動のあり方が模索されている。これまでの研究では独立型社会福祉士の活動スタイルの整理にとどまり、活動領域の検討が行われておらず独立型社会福祉士がどのような活動領域を形成しているかは明らかにされていない。そこで、本研究では独立型社会福祉士へのインタビュー調査から、独立型社会福祉士の活動志向性に着目し活動領域の類型化を行うことを目的とする。

**2. 研究の視点および方法**

調査協力者は、これまで聞き取り調査を行った独立開業している社会福祉士 97 名のうち調査時に日本社会福祉士会独立型社会福祉士名簿に登録している者 74 名とした。インタビューは調査協力者の活動地域を訪問し事務所や喫茶店などで行った。インタビューは半構造化面接を用い、①独立までのプロセス、②現在の活動内容、③活動の課題、④今後の展望を中心にインタビューを行った。インタビューは、1 回 1 時間半から 2 時間実施し、2007 年 8 月から 2015 年 9 月の期間に実施した。インタビューはすべて IC レコーダーに録音し、録音したデータは逐語録に起こした。インタビューデータの分析は 1 行ずつ読みまともりごとにコード化を行い概念の生成および定義づけを行った。そして概念を活動の志向性ごとにまとめ活動志向領域の抽出し分類を行った。また、作業効率を高めるために、質的データ分析ソフト Maxqda2010 と Excel2013 を使用した。研究の質の担保のために、分析作業は調査者である筆者に加え質的研究法を理解している第三者との検討を行った。

**3. 倫理的配慮**

本研究では、インタビューを依頼する際には調査の目的を伝えるとともに、事前にインタビューの依頼文書をはじめ質問項目やこれまでの調査結果などを送付し調査内容につい

て確認をとり調査の承諾を得た。また、インタビューの際には、再度研究の目的および話せる範囲で構わないこと、プライバシーの厳守について伝え、データの扱い(録音・逐語記録・分析手順と方法・結果の公開・論文化)については文書および口頭で説明し、了解が得られた場合に承諾書に署名してもらいインタビューを開始した。

#### 4. 研究結果

インタビュー調査から得られたデータをもとに独立型社会福祉士の活動志向性に応じて活動領域の類型化を行った。結果、独立型社会福祉士の活動志向領域を、①ケースアドボカシー志向領域(組織から独立することで獲得した中立性を発揮し個別のクライアントへのケースアドボカシーを志向する活動領域)、②地域貢献志向領域(社会福祉士の資格を活用しこれまで蓄積した知識や経験を地域社会に還元することを目的とした非営利の活動を志向する活動領域)、③ビジネス志向領域(株式会社や有限会社などの法人格を所持し、社会課題や狭間にある課題への対応をビジネスチャンスと捉え制度やサービスを活用して収益確保を志向する活動領域)、④社会変革志向領域(強い社会的使命感と高い専門性を背景に社会的排除の状態にある人に対してミクロからマクロの循環にもとづいたジェネラリスト・ソーシャルワークの展開によって狭間を生み出す社会構造に働きかけ新たな仕組みの開発を志向する活動領域)、⑤セカンドライフ志向領域(これまで蓄積した経験や知識を活かし退職後の第2または第3の人生を充実させるツールとして社会福祉士の資格活用を志向する活動領域)の5つに分類した。

#### 5. 考察

独立型社会福祉士は多様な活動志向性によって幅広い活動領域を形成し、既存の制度やサービスでは対応が困難な課題への対応を可能にしていた。しかし、独立型社会福祉士の活動志向性は独立以前の経験や現在の問題意識によって形成されており、経験や知識が豊富で得意とする分野、個人的に問題意識が高い社会的課題、報酬や社会的認知が得やすい事業などの特定の活動を限定的に行う活動志向領域の固定化がみられた。このような活動志向領域の固定化は、多職種連携を阻害し支援の縦割り化を招く恐れがあり、活動志向領域の横断的な対応が重要となる。独立型社会福祉士による活動志向領域の横断的対応には、①ジェネラリスト・ソーシャルワーカーとしての意識、②経済的基盤の安定、③独立型社会福祉士概念の整理、④職能団体によるサポートの必要性が示された。今後は、活動志向領域ごとの活動プロセスの提示を試み活動志向領域を形成する要因について探っていく予定である。

調査にご協力いただきました独立型社会福祉士の皆さまに感謝申し上げます。

本研究は JSPS 科研費 25380760 の助成を受けたものである。